



ひらほく新聞

ブログひらほく通信

登録なしで携帯でも閲覧可能。
当店からの各種お知らせや、ここに
に効くお話等、ぜひご覧ください！
http://ameblo.jp/hirahoku/



発行所 読売センター平塚北部(ひらほく)山本直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

日本人の生き方 報恩感謝

白駒妃登美 <しらこまひとみ>
埼玉県生まれ、福岡県在住。慶應義塾大学
卒業後、大手航空会社の国際線乗務員として7年半勤務。その後結婚、出産を経て、福岡県を拠点に結婚コンサルタントの活動をしながら、「博多の歴史」として歴史講座を積極的に展開。2012年、日本の歴史や文化の素晴らしさを国内外に広く発信する「株式会社こほぎ」を設立。全国各地で講演活動中。著書『人生に悩んだら「日本史」に聞こう』『感動する！日本史』

日本の歴史というのは、感謝と報恩の歴史。恩に報いるというのは、いただいたことへの恩返しと、そしてそれ以外へ恩を送っていくこと、次の世代に恩を送っていくこと。四月二十八日に講演をいただいた、博多の歴史のこと、白駒妃登美さんが、最後に熱くお話ししてくれた、日本人が大切にしてきた「報恩感謝」の思いについてお伝えします。

決して忘れるわけにはいかない、あの2年前の東日本大震災。世界各国が日本に義援金を送ってくれましたが、最も多くの義援金を送ってくれたのは、台湾です。

台湾は当時のレートで二百億円という莫大な義援金を送ってくれましたが、人口は日本の五分の一以下、平均年収は当時のレートで約百六十万円。日本人のサラリーマンの年収の半分以下。しかも、台湾は日本が一八九五年、日清戦争に勝利してから、一九四五年、太平洋戦争で敗れるまでの間、およそ五十年間も日本が統治した地域なのです。その台湾の人たちが、なぜこれだけの支援を日本にしてくれたのでしょうか？

皆さんは、八田與一さんという方をご存じですか？台湾の人たちは、日本の統治時代、日本人が台湾に学校を作って教育を施し、そしてインフラを整備していった、そのおかげで台湾の近代化ができたと思ってくれているのです。その日本のインフラ整備の象徴が、八田與一さんという土木技師の方。この方が造った「八田ダム」という当時東洋一だったダムのおかげで、台湾の農業生産性が上がって台湾はまさに近代化できたのです。

台湾では、中学校の歴史の教科書に、この八田與一さんのことが出ています。八田さんが亡くなつてからすでに七十年が経ちますが、台湾の人たちはずっとずっと日本人の恩というのを語り継いでくれているのです。

そういう歴史の中で、一九九九年、台湾で大きな地震がありました。この時日本も多くの義援金を送ったり、仮設住宅を日本の企業が造ったりしました。世界各国からレスキュー隊が多数駆けつけ、日本からも飛びました。

台湾の人たちが瓦礫を目の前にして、なすすべもなく「この下に家族がいます。助けて下さい！」と言ったとき、日本以外の国のレスキュー隊は、生命探知機が反応しなければ、そこを素通りしたそうです。なぜなら、災害後七十二時間以内に救助しないと亡くなってしまう確立が高いので、三日以内は生きている人だけを救おうとしたからです。

ところが、日本のレスキュー隊だけは、「この下に家族がいます！助けてください！」と聞くと、たとえ生命探知機が振れなくても一縷の望みをたくし、台湾の方々の思いに寄り添い、瓦礫を取り除いて

ていったそうです。しかし、科学技術が進歩しているので、生命探知機で反応しない場所で見つかるのは、やはりご遺体。そのご遺体を日本のレスキュー隊は、生きている人を助け出すかのように、丁寧に丁寧に抱きかかえて起こして、そして、隊員全員で整列して、目を閉じて頭を垂れて黙祷を捧げたそうです。

その姿を台湾の人たちは、テレビやインターネットで見、深く感動し、今度日本に何かあったら、絶対に恩返ししよう！と心に決めてくれたそうです。

二〇一一年、大震災が起こった年の暮れに、あるアンケートが台湾で成されたのですが、「今年一年であなたにとって一番の幸せはなんでしたか？」という、そのアンケートの答えで一番多かったのが、「日本への義援金が世界一になったこと」だったそうです。

日本の歴史というのは、感謝と報恩の歴史です。今度は私たちが台湾の人たちの恩に報いる番なのです。恩に報いるというのは、台湾への恩返しと、そして台湾以外の国へ恩を送っていくこと、次の世代に恩を送っていくこと、これをすべて含めて、「恩に報いる」ということです。

私たちはいま、世界各国に出ているとき、日本人だからと、すぐく親切にされたり、信頼してもらえたりします。それは日本の先人達の素晴らしい生き方に世界中が共感してくれているからです。いまの私たちの生き方が、二十

年後三十年後の日本を決めます。私たちは、そのタスキを受け取ったのです。まずは目の前の人を笑顔に、そして、自分にできること、その役割をしっかり引き継いでいきたいと思います。(以上、講演より) 八田與一さんのお話は、白駒さんの新著「感動する日本史」にあります。

環境が人をつくる 〜最幸の家族愛〜

先月始め、プロの治療家を目指し、高卒で単身長野から出て来たという熱い好青年に出会いました。ゴールデンウィーク中には前日に誘われた被災地ボランティアにも真っ先に手を上げて参加したという彼、その後、こちらのイベントを紹介すると、専門学校できた友人まで誘って快く参加してくれました。そして、フェイスブックでも繋がりが、彼のひととなりがあるようにして育まれてきたのかを知る、とても感動的な投稿に出会いました。まさに環境が人を育てるといふこと。とても素晴らしいお話、彼の投稿全文をご紹介します。

おはようございます！朝から涙ぐんでます。多分、世界一長い投稿です(自称)。この冒頭部分だけでも構いません。途中で読むのを止めていた書いても構いません。ただ、スライドして写真を見るだけでも構いません。

先週、両親の署名が必要な書類があり実家に郵送してありました。そして今日、朝イチでその書類が届きました！「ミカン箱に入って品名欄には、グローブ、菓子、他とあります。お菓子、実家の方には『くるみやまびこ』という銘菓(？)があるんです！これもお願いしました！他、スッゴク気に入ります！！」

テープを切って箱を開けてみます。まずは書類があり、ホットペッパーの食事券と一緒に家族からの手紙、そして写真その1です！(グローブ、お菓子の他、たくさん細かな物)

まずは妹からの手紙。「お兄ちゃんにお願ひがあります。帰ってきたらまたかまってね！。M発言と取られてもおかしくないフレーズです！笑いながらも、まず涙ぐましい手紙でした。母からの手紙には「グローブと一緒に細々としたものを送ります」とあります。

「母は強し」よく聞きますよね。独り暮らしをして身をもってそれを感じます。どんなにやるべきがあっても、どんなに疲れていても、やることはいいっぱいあるんです。それを全てやりこなすんです！だから、先週の母の日には朝イチでありがとこのメールをしました。

これがまた、止めを指すんですよ。「何気ない一日の積みかさねがいつの間にか成長という成果になっていることでしょうか。」「考えながらのムダづかい資金。」最後には「これから毎日『暑い！』『こしてえ』『日が続くでしよう。気ばらしもたまにはよろしい。しゅつまの健康を祈ってます。』『こしてえ』とは方言のひとつ。疲れたとか、だるいなあのような感じですよ。最後の止めの手紙でした。

郵便局員の方から受け取ったとき「あ、重ッ」って思いました。ですが、わかりました。D.A.I.さんの言葉をお借りすると、『家族からの愛』のほんのいちぶの重さなんだなあと。(D.A.I.さんとは、先日トククライプイベントと一緒に聴いたロックバンドおかのボーカル)

「細々と」しながらもミカン箱には「……」つくさんのモノがところ狭しと詰まっています。みなさん、ありがとございます！これからもよろしくお願ひします！

写真のもう一枚は家族みんなからの「愛いっぱいの手紙」でした。まさに溢れんばかりの最幸の家族愛。感動いっぱい、読んでいって思わず目頭が熱くなりました。本当に素晴らしいです。将来がとても楽しみになります！ずっと応援していきます！

私は「ありがとうございます」という言葉がどんなに大切かを一人のお母さんから教えていただきました。

そのうちでは、こんなことがありました。最初に生まれた男の子は高熱を出して精神薄弱になってしまいました。

次に生まれたその子の弟が、ちょうど2歳のときでした。ようやく口がきけるようになったある日、この弟がお兄ちゃんに向かって、「お兄ちゃんなんて、バカじゃないか！」と言ったのです。お母さんは、ハッとしました。それだけは言ってほしくない言葉だったからです。そのとき、お母さんは弟を叱ろうと思いましたが、しかし「待ってみよう、この弟の小さな体の中にお兄ちゃんをいたわろうとする気持ちが芽生えてくるまで、長い時間がかかるだろうけど待ってみよう」と思い直したのです。

その日からお母さんは、弟がその日お兄ちゃんに言ったことを毎日ノートにつけていきました。今日はこう言った、あしたは、あさっては。

そして一年たち、二年たちました。しかし、相変わらず弟は「お兄ちゃんのバカ」しか言いませんでした。小さいから仕方がないかもしれませんが、お母さんは何回もあきらめようと思いましたが。

弟が幼稚園に入った年の七夕の日のこと。偶然、近所の子もたちや親せきの人たちが、家の中にたくさん集まって来ました。あんまり人が来たのでお兄ちゃんは興奮したのか、みんなの頭をぶちはじめました。みんなは「やめなさい」と言いたかったのですが、そういう子どもですので言い出しかねていました。

そのとき、隣の部屋から小さな弟がパーッと飛び出してくると、お兄ちゃんに向かってこう言ったのです。

「お兄ちゃん、ぶつなら、ぼくをぶってちょうだい。ぼくは痛いって言わないよ！」
お母さんは長い間、その言葉を待ち続けてきました。「お兄ちゃん、ほかの人はぶたないで。ぼくは痛いって言わないから気が済むまでぼくをぶってちょうだい！」

その日のお母さんのノートには何と書かれていたでしょうか。「坊や、ありがとう。ありがとう。ありがとう。ありがとう。」と何ページにもわたって「ありがとう」と書いてあるのです。人間が本当に感動したときの言葉というのはこういうもの。

やがて、弟は小学校に入学。入学式の日、教室で席順が決まると、この弟の隣の席に、小児麻痺で左腕が不自由な子が座ったのです。お母さんの心は揺れました。家ではお兄ちゃん。学校ではこのお友達。

その晩、両親は家を引っ越そうか、弟を転校させようか、と朝まで2人で話し合いました。

最初の体育の時間でした。先生はこの手の不自由な子が、どうやって体操着に着替えるか黙って放っておきました。それがきつと、この子のためになるだろうと思ったのです。そして、その子は生まれて初めて、右手一本で体操着に着替えました。しかし、着替え終わったときには体育の時間は30分も過ぎていました。

二度目の体育の時間に先生は、もう一度放っておきました。するとどうでしょう、先生が校庭に出ると、この手の不自由な子がほかの子と一緒に、きちんと並んで待っていたのです。どうしたのかと思って、先生は、次の体育の前の休み時間に柱の陰からそっと見ていました。すると、前の時間が終わるとすぐにあの弟が、まず自分の洋服をパーッと着替えてから、その隣のお友達を一所懸命手伝うのです。

小学校一年生です。この不自由な手に体操着の袖を通してやるなんて、お母さんでもむずかしいのです。それを一所懸命通して2人で駆け出して校庭に出て来ました。

そのとき先生は、この弟をほめてやろうと思いましたが、しかし、ほめたら「先生にほめられるからやるんだ、ほめられたからやるんだ。」ということになるかもしれない。それではせっかく、あの子が自発的に始めたものをこわす結果になってしまいます。

そこで先生は、ほめてやりたいけれども心を鬼にして黙っていたのでした。

ある七夕の日のこと。授業参観をかねた初めての父母会が開かれました。先生は子どもたちに短冊にお願い事を書かせて、それを教室の笹に下げておきました。お母さんたちが集まったところで、先生は一枚一枚、短冊を読んでいきました。小学校一年生ですから「あのおもちゃがほしい」「おこづかい、もっとちょうだい」というようなことが書いてありました。

ずっと読んでいった中の一枚の短冊にこう書かれていました。「かみさま、ぼくのとなりのこのうでを、はやくなおしてあげてください」。あの弟が書いたのです。

先生はこのいちずなお祈りを読むと、もう我慢が出来なくなって、あの体育の時間のことをお母さんたちに話しました。

小児麻痺の子のお母さんは、毎日、わが子どもが教室でどんなに不自由しているだろう、申し訳ないことをしてしまったと教室に入らずに廊下から中の様子をじっと見ていましたが、先生の話聞いたとき、突然、廊下から飛び込んできました。そして教室に入るなり、べったりと床に座り込んで、この弟にしがみついて絶叫したのです。

「坊や、ありがとう。ありがとう。ありがとう。ありがとう。ありがとう。ありがとう。」その声が学校中に響き渡ったそうです。

私はこんな小さい時からお兄ちゃんを思い、お友達を助け、みんなの前でシャツを着替えさせる勇気をもったこの弟は、たとえ成績が悪くてもこの子はこれから、どんな素晴らしい人生を歩んでいくのだろうかと思います。そして、こうしたやさしい思いやりの心と才能を時間をかけて引き出したお母さんと先生の気くばり。私はこういうのを教育と呼ぶのだと信じています。(おわり)

=====
お母さんや先生の、ずっと信じて我慢して待つ姿勢こそが最幸の気配り。そして生まれた弟くんの深い深い愛と思いやり。ホント素晴らしいですね。

このお話は、鈴木健二さんの著書「続 気くばりのすすめ」からのもの。教えてくれたのは、自分が筆文字他いろんなことを学ばせていただいている、しもやん(下川浩二さん)。「Amazon で中古1円で購入した本でもこんなにも感動をもらえる、本って最幸に素晴らしい」とメルマガで紹介、広めてくれたものです。 そのメルマガより名言 「人」は「本」でできていると書いて「体」。今日読んだ本が心の一部となる。

～「鷹の選択」～

鷹は鳥類の中でも寿命がもっとも長く、70年ほど生きることが出来るといわれています。しかし、実際にその長い命を全うするためには、40年という節目に、必ずや一つの大きな試練を乗り越えなければならないといわれています。40年を過ぎる頃には、鷹は爪の老化が始まり、獲物を捕らえにくくなります。くちばしも長く伸び、脆くなってきます。さらに、羽が多く、分厚くなりすぎ、重くて飛びにくくなるそうです。

そこで鷹には二つの選択がやってきます。このまま何もしないでただ死を待つか、自らを変えるために様々な苦痛に耐え、生まれ変わるか、どちらかの選択・・・。

生きる道を選んだ鷹は、渾身の力を振り絞って絶壁に飛び上がり、巣をつくります。最初の段階は、岩石を突いて痛みに耐えながら、くちばしを削り落とし、再び生え出るのを静かに待ちます。そして、次の段階では、生え出たくちばしで、さらなる痛みに耐えながら爪を剥ぎ取り、再生するのをさらに待つのです。最後の段階は、生え出た爪で、古い羽を1本1本抜き取っていきます。

鷹は生まれ変わるために、ひたすらさまざまな苦痛に耐えて過ごすのです。やがて鷹は、新たなくちばしと、新たな爪と、新たな羽が揃った翼で、再び、大空を羽ばたきます。

=====
このお話は、その通り事実かどうか確実性はないのですが、私たちの人生に置き換えてみても、とても大きな学びがあると思い、ご紹介させていただきました。

インターネット動画YouTubeで、同名の『鷹の選択』で検索していただきますと、4分程の素晴らしい動画がありますので、ぜひごらんください。

～「いのちとは・・・」～

先日、ある野外イベントで、クラシックの名曲をアレンジし、POPS、JAZZ、ラテン、タンゴの要素を取り入れ、情熱的な音楽を演奏するユニークなクラシックユニット、asian Trinity(アジアトリニティ)という美人姉妹のとてもステキな、素晴らしい演奏を聴きました。

実は、事前にご紹介いただいた方に衝撃的なことを聞いていました。現在、プロ活動をしている彼女たちのスタートは、介護施設に入った祖父に3姉妹の演奏を見せたかったことが結成のきっかけだったといえます。そう、実は3姉妹のユニットだったのです。なんと、CDデビューのレコーディングも終わっていた2008年の11月、末娘の茉麻(まあさ)さんが、突然の交通事故で、21才の若さで亡くなってしまったのです。

希望に燃え、夢にあふれていた彼女は、ブログに次のように書いていたそうです。

「私たち asianTrinity わ自由に楽しく音楽を伝えて行きたい。聴いて下さった人が、『asianTrinityの演奏を聴いて元気が出た楽しかった』って言ってくれるような音楽を皆さまの心に届けたい！」

現在は、家族で深い悲しみ乗り越え、その茉麻さんの思いを大切に引き継ぎ、姉二人で活動を続けています。(3人によるCD有り、HP、YouTubeなどでもどうぞ)

イベントの当日、お二人のお母様にもお会いしました。そのお母様と知り合って、今があるという、自分に今回のイベントを紹介してくれたTさんとは不思議なご縁でした。

自分の筆文字をとて気に入ってくれたTさん。そのイベントの後に、メールをいただきました。実はTさんも数年前に、同様な形で、最愛の人を突然の事故で亡くしていたということが書かれていました。あえてここに多くは書きませんが、壮絶な過去がありありと伝わってきて、読んでいて涙が溢れました。

実は先月、東京ドームでの野球観戦で、自分の2列前の方が、練習ボールを頭に直撃して流血、倒れて運び出されました。幸い重傷には至らなかったことを後に知りましたが、「もし、自分だったら」と考えた時、恐怖と共に「いのち」の意味について痛感しました。

「いのち」は、いつ終わるのか誰にも分かりません。分かっているのは、誰にも必ず、いつかは死が訪れるということ。

「いのち」とは、「与えられた時間」。

いつまでかが分からないからこそ、与えられている「いま」というこの時間に有り難く感謝して、目の前の全てのことに全力で向き合うこと。それこそがそれぞれに与えられた大切な役割です。たくさんの方に支えられて、やっと立ち直れたというTさんの「いま」を懸命に生きる幸せそうな笑顔が印象的でした。